

陳舜臣さんを語る会通信

NO.70

May. 2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2022年5月20日

日本史を題材にした『山河太平記』『人物・日本史記』『楠木正成 湊川の戦い』

本号では、陳舜臣さんの著作で、日本史を題材にしたエッセイ、史談を三冊、取り上げました。発行順で、『山河太平記』（1979 平凡社）、『人物・日本史記』（1981 文藝春秋）、『楠木正成 湊川の戦い』（1990 天山文庫）です。下の枠内、傍線は編集委員の加筆です。（編集委員 橘雄三）

『山河太平記』「あとがき」より抜粋

本書は雑誌『太陽』に、一九七八年新年号から翌年六月号まで、十八回にわたって連載したものである。

『太平記』については、私はその主要舞台の一つである神戸に生まれ育ったこともあって、少年時代から少年なりの関心をもっていた。物語に出てくるほかの土地を訪ねたいという願望もあった。『太陽』が与えてくれた機会に、私は少年のころからの宿題をはたしたことになる。

連載中からも、題名についての質問をよく受けた。執筆にあたって、私は太平記ゆかりの土地を、じつさいに歩いてみるつもりであった。舞台となった山河に接し、それから受けた印象を醗酵させて筆をおこす計画なので、「はじめに山河ありき」というかんじである。したがって、題名の頭にどうしても「山河」の二字がほしかった。質問を受けるたびに、私は、

「山河に接して太平記について語る。を省略したものと考えていたきたい、と答えたものである。説明しなければわからないようなタイトルをつけたことについて、反省はしているが、ふしぎに愛着があるので、本にまどめるときにも、それを変える気持ちはなかった。

一九七九年七月 六甲山房にて 陳舜臣



平凡社版表紙

『人物・日本史記』「あとがき」抜粋

山上憶良と角倉了以の二篇を除いて、すべて『文藝春秋デラックス』に連載したものである。当時、この雑誌は毎月特集を企画していて、その特集にふさわしい人物を一人とりあげて、私が執筆した。山上憶良も平凡社の雑誌『太陽』の万葉集特集の号に書いたもので、事情はほぼおなじであるといえる。

『文藝春秋デラックス』に連載したもののうち、文化からやや遠いと思われる人物は除外した。文化とかかわりあった人物の列伝という形をとったのである。坂上田村麻呂は、武のすがたを借りて文の道をおこなおうとした人物と解した。山田長政は異なった文化圏にまたがって生きた人物という意味で、本書に含めたのである。

角倉了以は小学館の『人物日本の歴史』第十一巻のために書き下したもので、この人物には、私は深い愛着があるので、とくに本書にいらしてもらうことにした。

昭和五十六年四月 陳舜臣



文春文庫版表紙

『楠木正成』「あとがき」より抜粋

収録した五篇とも、小学館や集英社の企画したシリーズの一部として書いたものである。依頼をうけて書いたのだが、あまり関心がないとか、気が進まないとかいった場合、執筆を断わるのは自由である。書くことを承諾したからには、テーマが私に書く意欲を起こさせたのである。

楠木正成は神戸に住む私にとって地縁につながる英雄であり、彼の墓誌を撰した朱舜水是、中国からの亡命者であった。鑑真と阿倍仲麻呂は、それぞれ故国を離れて、隣国で生を終えた「懸け橋」のシンボルのような人であった。

私の家の家業は貿易であり、若いころ私は小さいスケールだが、それに従事したこともある。角倉了以や島井宗室は、同業の先輩ということになる。五人とも私にとっては有縁の人であり、いくばくかの鎮魂の願いをこめて、ペンを進めたことを覚えていいる。

一九九〇年初夏 六甲山房にて 陳舜臣



天山文庫版表紙

『太平記』とは 内容、時代背景ほか

《1. 『太平記』とは》

全40巻。後醍醐天皇の即位から、鎌倉幕府の滅亡、建武の新政とその崩壊、その後の南北朝分裂、観応の擾乱、2代将軍足利義詮の死去と細川頼之の管領就任まで（1318年 - 1368年）の約50年間を描く軍記物語です。小島法師が作者の一人。

《2. 後醍醐帝が目指した「天皇親政」》

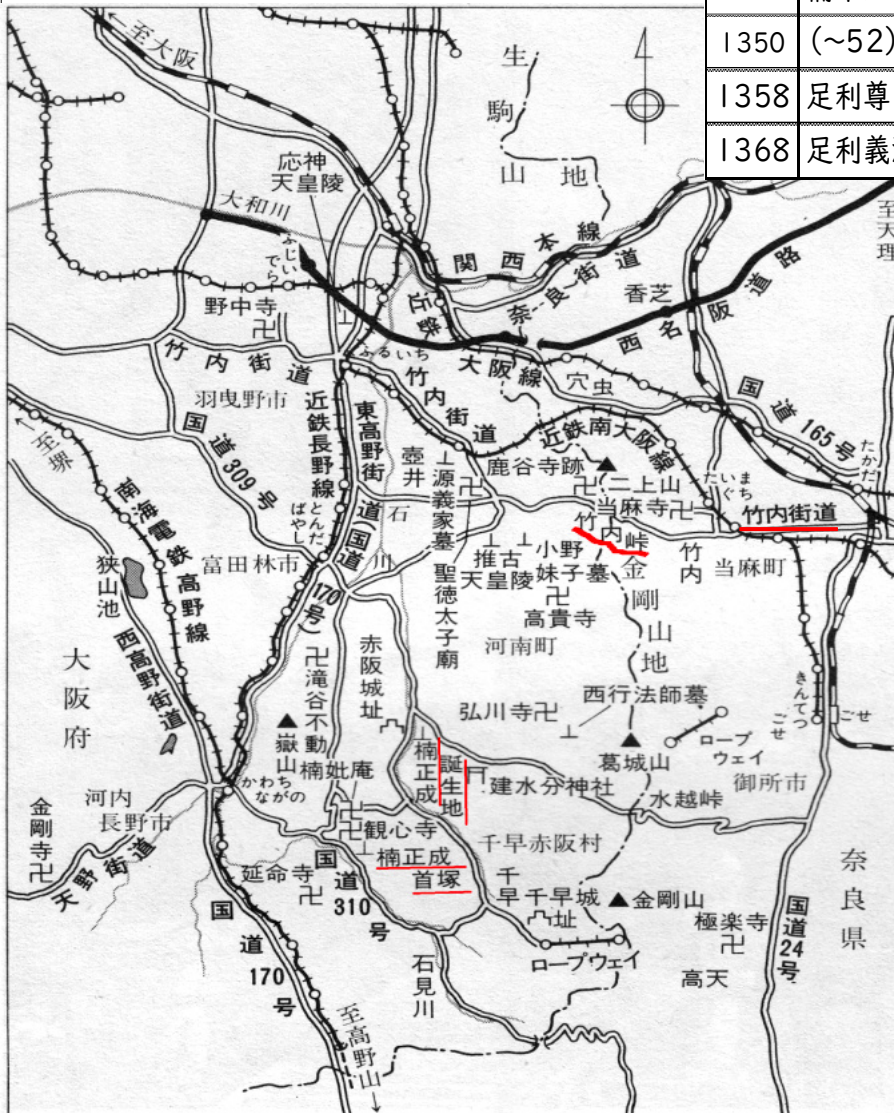
「揺らぐ建武体制」から引用します。

後醍醐という帝号は、死後におくられたのではなく、生前に天子みづからえらんだのである。醍醐天皇を尊崇して、「後の醍醐」たらんという覚悟を、自選の帝号によって示した。「後」の字を冠して祖先の帝号をうけつぐのは、あやかるという気持ちがあるだろう。在位の長さにあやかりたかったことであろうが、「延喜の御代」と呼ばれる聖代を再現したい抱負のほうが強かったにちがいない。

醍醐帝の時代は天皇親政の黄金時代だった。それこそ、後醍醐の目指すものであった。

《3. 『太平記』の時代背景》

1318	後醍醐天皇即位
1324	正中の変(天皇の討幕計画発覚)
1331	元弘の変(再び討幕計画発覚) 天皇笠置山城へ脱出 楠木正成挙兵
1332	後醍醐天皇、隠岐へ流罪→脱出
1333	足利尊氏鎌倉から上洛、途中で討幕を決意 鎌倉幕府滅亡⇨後醍醐天皇帰京、建武の新政
1335	中先代の乱
1336	建武の乱(建武政権⇨足利尊氏ら) 湊川の戦い(楠木正成戦死) 足利尊氏、光明天皇を擁立 後醍醐天皇、吉野へ(南北朝の対立はじまる)
1338	足利尊氏、征夷大將軍に就任(室町幕府創設)
1339	後醍醐天皇没→後村上天皇即位
1348	楠木正行(まさつら)、四條畷で戦死
1350	(~52) 観応の擾乱
1358	足利尊氏没→義詮第2代将軍に(~67)
1368	足利義満第3代将軍に(~94)



《補足(1) 「建武の新政」の脆さ》

武家の政権を倒すのに武家の力に頼ったところに矛盾がありました。諸刃の剣でした。それが、「建武の新政」の脆さとなったのです。

《補足(2) 「南北朝時代」》

1336年後醍醐天皇が大和国吉野に入ってから、92年後龜山天皇が京都に帰るまでの57年間。南朝(大覚寺統)と北朝(持明院統)とが対立抗争した。それ以前の建武政権期を含めていうことも多い。(広辞苑)

《補足(3) 「楠正成」》

左の地図は3頁掲載の『太陽』(1978年新年特別号)からの転載です。地図中、「楠正成」とありますが、これは『太平記』の表記に従っているのでしょう。

『山河太平記』の初出は、平凡社『太陽』

『山河太平記』の初出は、平凡社『太陽』の1978年新年特別号～79年6月号(18回)です。第1回が掲載された1978年新年特別号が入手できましたので画像を中心に紹介いたします。

◆新連載◆	
山河太平記	峠を越えて 陳舜臣 写真・長野重一
骨董夜話	内八花 鎌倉 緑柳 銅化 紅霞 水指 写真・入江泰吉
易道学校の巻	シヨウ君の一日 6 漫画・文 東海林さだお 写真・水野麻 弘文
紅と青と黒	日本の橋 7 絵・建石修志
錦帯橋	山口県岩国市の木造アーチ橋 写真・比嘉康雄
茶店で食べる餅の味	京都その一 杉本苑子 写真・榎本敏雄
秘境ヒマラヤラマ教徒の祈り	世界の旅 7 インドカシール 写真・文 土屋 守
比叡山	古都旅情 7 瀬戸内寂聴 詩画 風間 完
169	142
156	140
129	161
138	119

赤字で特筆大書「山河太平記」とあります。

同号 目次の一部

表紙・部分拡大。
「新連載 陳舜臣 山河太平記」の記載が見えます。



『太陽』一九七八年新年特別号表紙

「山河太平記 河内・峠を越えて」掲載頁



単行本の「あとがき」で、陳舜臣さんは、

執筆にあたって、私は太平記ゆかりの土地を、じっさいに歩いてみるつもりであった。

舞台となった山河に接し、それから受けた印象を醗酵させて筆をおこす計画なので：

と、おっしゃっています。できるだけ多くの取材旅行をお考えだったのでしよう。そして、その取材旅行には、出版社のカメラマンが同行しています。写真・長野重一とあります。掲載頁には、第一頁は全面の写真(この段、右で、あと、続いて、たくさんカラー写真が入っています。楽しい企画です。

勅使はどの道を通して河内へ行ったのか？

連載第一回、冒頭部分です。

『太平記』巻第三の「主上御夢の事」のくだりである。笠置へ臨幸なった後醍醐天皇がまどろんでいるとき、紫宸殿の庭前とおぼしいところに、大きな常磐木ときわぎがあり、南へさし

た枝がことに繁り栄えているありさまを夢にみた。夢のなかでその木の下に、三公百官が列座しているのに、南むきの上座に坐っている人がいない。天皇が、「誰のために設けた席であるか？」と訊いたところ、びんずら結った童子が忽然とあらわれて跪き、涙ながらに「これが玉座でございます」と答えて、遙か天上に去った。夢からさめたあと、天皇は夢判断で、「木ニ南ト書タルハ楠トイウ字也」と解し、成就房律師を召して、「このあたりに楠という武士はいるか？」とたずねたところ、「河内国金剛山の西に楠多聞兵衛正成といつて弓矢取つて名を得た者がいます」という答であった。そこで天皇は「急いでその者を召せ」と命じた。

さて、勅使は、笠置からどの道を通して河内へ行ったのか？そして、楠木正成は、どの道で笠置へはせ参じたのか。『太平記』に、そこまでの記述はない。陳舜臣さんはいろんな可能性、条件から竹内峠たけうちとうげの麓、竹内の集落です。左の写真は、竹内峠の麓、竹内の集落です。付近の地図については、本号2頁を見てください。



『人物・日本史記』内容一覧

題・人物	補 足	初 出
やまのうえおくら 山上憶良	660-733頃 万葉歌人 702年遣唐録事として入唐、707年 ころ帰国 後に筑前守 「貧窮問答歌」	『太陽』 1977年5月号
がんじんわじょう 鑑真和上	688-736 唐の学僧 753年来日 東大寺に初めて戒壇を 設け、聖武上皇らに授戒 唐招提寺を建立 日本の律宗の祖	『文藝春秋デラックス』 1975年5月号
さかのうえのたむらまろ 坂上田村麻呂	758-811 平安初期の武人 征夷大將軍となり、蝦夷征討に 大功 京都の清水寺を建立	『文藝春秋デラックス』 1975年12月号
すみのくらしゅうい 角倉了以	1554-1614 江戸初期の豪商 安南国に朱印船を派遣 大堰川・富士川・天竜川の水路を開き、また、高瀬川を開削	『人物日本の歴史』 第11巻 1975年8月
ほんあみこうえつ 本阿弥光悦	1558-1637 江戸初期の芸術家 書、焼きものに秀で、茶道 をたしなむ 晩年、徳川家康から鷹ヶ峰の地を与えられる	『文藝春秋デラックス』 1976年1月号
ほそかわがらしや 細川ガラシャ	1563-1600 明智光秀の娘 細川忠興の妻 キリシタン信者 関ヶ原の戦で、人質として大阪城に入るのを拒み自殺	『文藝春秋デラックス』 1975年10月号
やまだながまさ 山田長政	?-1630 江戸初期の海外渡航者 シヤム(現、タイ)に渡り、 国都アユタヤの日本人町の頭領となる	『文藝春秋デラックス』 1975年7月号
まつおばしょう 松尾芭蕉	1644-1694 江戸前期の俳人 伊賀上野に生まれる 俳諧 に高い文芸性を賦与 蕉風を創始 「奥の細道」	『文藝春秋デラックス』 1975年6月号
しばこうかん 司馬江漢	1747-1818 江戸後期の洋風画家 初め浮世絵を学び、の ち写生画に転じ、さらに長崎のオランダ人に油絵を学ぶ	『文藝春秋デラックス』 1976年3月号
すがえますみ 菅江真澄	1754-1829 江戸後期の旅行家・民俗学者 信濃・東北・北 海道を遊歴、津軽・出羽地方に滞在 「真澄遊覧記」	『文藝春秋デラックス』 1976年4月号
かつしかほくさい 葛飾北斎	1760-1849 江戸後期の浮世絵師 優れた描写力と大胆な 構成を特色とする独特の様式を確立	『文藝春秋デラックス』 1975年9月号
おおたにこうずい 大谷光瑞	1876-1948 西本願寺門主 探検隊を率い中央アジアの考 古学的調査に貢献	『文藝春秋デラックス』 1975年8月号

『楠木正成 湊川の戦い』内容一覧

部	部の題	人物	小見出し ほか
第1部	第1部 楠木正成 湊川の戦い	くすのきまさしげ 楠木正成	「楠公さん」という言葉 後醍醐天皇との出会い 楠木正成の素性 時代錯誤の「建武の中興」 足利尊氏の人望 正成の献策 戦機近づく 「正気」は不滅である 湊川の合戦前夜 正成の美意識 炎天下、六時間の死闘 正成の最期 
第2部	第2部 日中の懸け橋	がんじんわじょう 鑑真和上 あべのなかまろ 阿倍仲麻呂	若き鑑真 招きを受けて 不惜身命 大渡海 日本の日々 英俊な遣唐留学生 大学を終え官職につく 詩に描かれた生活姿勢 日本に帰れず 詩人との交遊 訣別のうた 南海に流されて ほとばしる祖国愛
第3部	第3部 乱世の国際的 商人	すみのくらしゅうい 角倉了以 しまいそうしつ 島井宗室	豪族の膨張 安南貿易の開始 角倉船の活躍 水に憑かれた男 角倉家の文化事業 国際的商人の末裔 明をめぐる貿易 権力と結ぶ豪商の宿命 "茶の湯"でつくった人脈 豊臣秀吉の「壮図」 避戦への努力むなし 時代の熱を受けた町・博多 人生の三段階 律儀・孝行・慇懃であるべし

■ 画像は楠公武者行列(楠木正成を称え偲ぶ) 写真の年月は不詳 湊川神社ホームページより